

「自分が弱いときにこそ強い！」

私は中高6年間バドミントン部に所属していました。

もともと、家族はクリスチャンで神様を信じる家庭でした。生まれたときから日曜日に教会に通うことが当たり前でした。聖書に対して抵抗もなく、教会に行くことに疑問をいだかずにご過ごしてきました。中学からは、私立のミッションスクールに入学し、バドミントン部に入ることにしました。そこで私は、先輩の怖さを思い知りました。特に私たちの代は先輩とうまくいかず、怒られてばかりいました。先輩を神様のように扱うことが当たり前でした。それに耐えられずやめていく仲間が多かったです。しかし私はただ、バドミントンが大好きだったから続けていくことができました。

そんな環境で育った私も、高校2年生になって部活を引っ張っていく立場になりました。部活においての一番のビックイベントは、夏の合宿です。合宿というと、私にはいい思い出がありませんでした。毎年先輩にこっぴどく叱られ、泣いたこと。仲間同士が分かり合えず、もめたこと。技術向上もできましたが、それ以上に精神面で苦い思い出しかない私にとって、部長として夏の合宿をむかえることが恐怖でしかありませんでした。正直、同期のメンバーも全員が同じ方向を向いているとはいえない状況であり、部活をひっぱっていかなくてはならないというプレッシャーに耐え切れず、本当に行きたくない状況で、合宿の日を迎えることとなりました。不安でいっぱいなのがしたことは、毎朝起きてすぐ、トイレでお祈りをするのでした。「神様、どうかわたしに力を与えてください。仕切る力はないです、でも神様により頼むとき必要な力が与えられることを私は信じています。」旧約聖書の詩篇には、国の指導者であるダビデが神様に助けを求める歌がたくさん書かれています。指導する規模は違うけれど、わたしはそのダビデのように、毎朝祈って過ごしました。合宿中はただがむしゃらに練習をし、気がつけば不安もなくなっていて、あっという間に終わりの日を迎えていました。振り返ってみると、今までで一番楽しい合宿であったように思います。後日、コーチから次のようなメールをいただきました。「合宿お疲れ様でした。充実した6日間でしたね。何よりも安川の統率力に驚き、感動しました。」わたしはこのメールを読んだとき、神様に感謝の思いでいっぱいでした。神様が私に力を与えてくれて、想像していたこととは違う、素敵な合宿となったこと、これは自分の力ではありません。神様が不安でいっぱいの弱い私の祈りに応えてくれて、必要な統率力を与えてくれたのです。

神様は困難な状況においても共にいてくださるということは、部活生活だけでなく今後の人生でも同じです。それを信じ、色々なことに取り組んで行こうと思います。